

聖霊降臨後第6主日(特定12)

2011/7/24

列王記上3章5節～12節

聖マタイ福音書第13章31節～33節、44節～49節a

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

もうかなり前のことですが、「違いの分かる男」という言葉がテレビのコマーシャルで流れたことがありました。覚えていらっしゃるでしょうか。確かコーヒーのコマーシャルだったと思いますが、他社の製品とは一味違う、その深い香と味わいが分かるか、と問いかけているようなコマーシャルでした。そのコーヒーの味の持っている奥深さは、分かる人には分かってその製品を選び取るだろうけれども、分からない人にはどこのコーヒーでも同じだよね、と言っているかのようでした。

さて、今日の福音書には、5つの天の国についてのたとえが集められています。「天の国」というのは、日本聖書協会訳の口語聖書では「天国」となっていました。マタイ福音書の記者はユダヤ人ですから、「神」という言葉を使うことは畏れ多いために避けてきました。その代わりに、「天」という言葉を用いました。従って、「天の国」というのは「神の国」と同じことです。

神の国というのは、地理的な一定の地域を表すのではなくて、神さまの支配を意味します。神さまが生きておられ、すべてのものを統べ治めておられる。その現実が、神の国です。死んでから行く天国のことではなくて、この世界の中で、神さまが働いておられる現実を指しています。わたしたちは、信仰の眼差しで、このような神の国を見るのです。

イエスさまはたとえをもって、天の国について弟子たちに教えられました。今日のたとえの初めの2つは、天の国を「からし種」と「パン種」にたとえています。この2つのたとえは同じ趣旨のたとえです。からし種という極めて小さな種、ゴマ粒よりも小さな種、それが4メートルもの大きな木に成長して、その成長ぶりは空の鳥が枝に巣を作るほどだということです。

パン種も、微量のイースト菌が粉全体を膨らませて、3サトン、この分量は、ある解説書では150人分のパンと書かれていますが、それ程の分量全体を膨らませる結果となるのです(『イエスの譬えの意味』)。

また、過越しの祭りの時には種入れぬパンを食べて祝ったという習慣がありました(出12:18)。過越しの祭りに続く除酵祭、種入れぬパンの祭りには、古いパン種を家の中から取り除いて家を清めることが行われました(出12:15)。

従って、この2つのたとえでは、今は小さな目立たないものが、そして取り除かれて捨てられるようなものが、やがては大きくなって、全体を変革するような働きをするということが言われています。今、始まったばかりの小さな活動が、将来においてはビックリするほどの大きな結末をもたらす、それが天の国だと言われているのです。

次の2つは、「畑に隠した宝」と「高価な真珠」のたとえです。この2つのたとえも同じ共通する事柄を言おうとしています。つまり宝も、真珠も手に入れるためには、持ち物をすっかり売り払ってでも手に入れようとするのだ、それが天の国だと言うのです。今、持っているもの全てに棄てても欲しいもの、手に入れたいもの、それが天の国です。そうするのが当然だと言うのです。

イエスさまは「山上の説教」の中で、「真珠を豚に投げてはならない。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたにかみついて来るだろう」(7:6)と言っておられます。豚は真珠の価値が分かりません。特に、昔は真珠の養殖の技術はなかったし、イミテーションを造ることも、まだできなかつたでしょう。ですから、真珠を手に入れようと思ったら、天然のものを探し求めなければなりません。真珠はとても貴重なものだったのです。物の本によれば、エジプトでは真珠を礼拝の対象にまでしたということです(『新共同訳新約聖書注解 I』)。

ですから、もし、わたしたちが、自分の持っているもの全てと交換してまでも、天の国を求めようとしないならば、それは、豚が高価な真珠の価値を分らないで、踏みにじってしまうのと同じことだ。わたしたちもまた、天の国の大切さを分かっていない、ということになるのです。この世で価値があると言われているものなどとは比べようもない、途方もな

い天の国の素晴らしさ、その決定的な違いが分かっていない。違いの分からない男、或いは女であることを暴露してしまうことになるのです。違いが分かる人、それがクリスチャンです。

自分が、欲深くなっているようなとき、或いは、自分の人生に失望したり、教会や社会の現状に展望を見失って、投げやりになってしまうとき、天の国のことが分かっていないと、言わざるを得ないのです。

5番目のたとえば、湖に投げ入れられた網のたとえばです。良い魚も悪いものも一緒に網に入って来る。このたとえばは、先週の毒麦のたとえと似ています。教会の現状は、良いものも悪いものも共存しています。だからといって、性急に善悪を識別して、悪いものを審こうとすることに対して警告がなされています。そして、世の終わりにおける、神さまの勝利、悪に打ち勝つ勝利について確信が語られています。天の国は、そのようなものだとされるのです。

このような天の国のイメージ、天の国に対する確信から、わたしたちの生きているこの世界や教会を見るときに、わたしたちは勇気と励ましを与えられます。

特に日本の教会のように、その勢力も影響力も社会的・政治的に極く小さなものでしかないと思われるようなところでは、教会の働きというのは、個人の魂の救済が課題であって、それ以外の事柄は、教会の取り扱う問題ではない、と理解されることがしばしばあります。教会の社会的な発言などは、誰も耳を貸してくれないように感じられます。同じ宗教でも、政治を動かして社会の先行きに方向性を与えようとする勢力があります。それに比べるならば、日本の教会の発言は、全く何の影響力もなく、無視されっぱなしであるかのように見えます。

しかし、小さなもの、捨てられるようなものが、全体に大きな影響を与えるようになるという天の国のメッセージは、教会が何処に目を向けなければならないかを、わたしたちに改めて問いかけているように思います。この世界の中であって、神さまが生きて働かれているところに、わたしたちも目を向けるのです。

神さまよりも、悪の勢力の方が大きな支配力を及ぼしているかのように見える世界の中で、弱々しく誰も顧みないような働きにおいて、天の国が始まっていることを、わたしたちは見なければならぬのです。そして、その神さまの働きは、将来は大きく成長することが約束されているのです。その確信から、今の小さな働きを見る、そのような視点の転換を求められているのです。教会の関心が、神さまの関心と重なっている限り、それは決して無にはならないのです。必ずや、大きな影響を与えることになるのです。

そして、そのような神さまの働きを見出したなら、隠されている宝を発見したのも同然です。神さまが働かれているということを知ることは、何もかも捨てて、その神さまの前に服すること、従うことにほかなりません。

今日の旧約聖書日課は、ソロモンが王位に就いてその王権が確立したときに、主がソロモンに、あなたの願うものを与えようと、約束なさったことが書かれています。ソロモンは、その時に主に対して、自分を取るに足りない若者で、どのように振る舞ったら良いか分かりません。民を裁くために、善悪を判断するため、聞き分ける心を与えてくださいと願いました。

この願いは主によって聞き入れられて、ソロモンは、知恵の心を与えられました。自分の利益を寸毫も求めずに、神さまによって立てられた王としての務めを果たしていくための、最も必要とされる知恵を求めたことが、主によって認められたのです。

知恵は神さまの働きです。神さまを代理する王としての働きに必要不可欠なものです。それが与えられることのみを求めたことが、主によって受け入れられ、喜ばれることとなりました。ソロモンがこの時に求めたものは、神の働きの器として、ふさわしいものとなることでした。自分を通して神さまが働かれる、そのための道具となることを願ったのです。神さまの支配のもとに服することに、全ての関心を寄せたのです。自分を大きくするのではありません。神さまが大きく働いて下さることに、全ての関心と注意を向けたのです。

わたしたちは、ともすれば自分の今までの働きの積み重ねの上に立って、生きようとしています。そして、わたしたちに与えられている賜物を十分に生かして用いることは、大事なことです。しかし、もっと大事なことは、神さまがそれらの賜物を用いて下さるために、捧

げることです。神さまは、わたしたちの捧げものを、たとえそれが小さく取るに足りないように見えるものであっても、それを用いて働いて下さいます。そのことが確信できるならば、わたしたちは天の国に生きているのです。

わたしたちが洗礼を受けて、教会に連なっているのは、隠された天の国、生きておられる神さまの働きに目を留めて、その働きに加わっていかうとしているからです。自分の力で何かができる、それを試してみようということではありません。ただ、神さまの支配のもとに服して行こうとしているのです。どのようにしたら、与えられたものを捧げることが出来るか、そのことのみに関心を持って生きるのです。その関心の中に生きるために、天の国、神の国に生きるものとなるために、わたしたち一人一人は、クリスチャンとして召されているのです。今日は、そのことを改めて心に留めたいと思います。